

No.21
2005.3.30

いしかわの遺跡

発見!中世の製鉄遺跡



ほうす いがわだに
鳳珠郡門前町飯川谷から中世の製鉄遺跡が見つかりました。

石川県では現在260箇所以上の製鉄遺跡の存在が知られており、そのうちの半数近くが門前町で発見されています。県内の製鉄遺跡は古代のものが圧倒的に多く、中世についてはあまりよくわかっていません。その意味で飯川谷製鉄遺跡は重要な遺跡といえるでしょう。

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

Ishikawa Archaeological Foundation

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
E-mail mail@ishikawa-maibun.or.jp
ホームページ <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

平成16年度発掘調査から

飯川谷製鉄遺跡



地下式炭窯(平坦面 南から)



池完掘状況(平坦面 北から)

飯川谷製鉄遺跡は鳳珠郡門前町飯川谷地内に所在します。仁岸川の支流、北浦川上流の山地にあり、広い平坦面と谷筋に挟まれた斜面に立地しています。平坦面では掘立柱建物や池を、斜面では炭窯や排滓場などを確認しました。

掘立柱建物は3棟で、そのうちの1棟は建替えが行われていました。掘立柱建物の東には池があり、周りを石列で囲むような状態で見つかりました。

炭窯は地下式でした。石や鉄滓(鉄を作ったときにできる不純物)で狭められている焚口が2ヶ所見つかっていることや、奥壁がさらに奥のほうへ1度拡張されており、それに伴う天井部の煙道がそれぞれ1箇所ずつ確認できたことなどから、この地下式炭窯は改築されていたことがわかりました。窯本体から焚口にかけて壁沿いに巡り、焚口で合流する排水溝も確認できました。排水溝の上には石や鉄滓が敷いてありました。排滓場は斜面中腹下半から谷筋の合流部の範囲に広がっていました。珠洲焼の甕や鉢、白磁の小皿、瀬戸の花瓶、鉄滓などが出土しました。土器や陶磁器は掘立柱建物や池から見つかり、その多くは室町時代のものでした。

製鉄炉の存在が想定される箇所は平成17年度に調査を継続する予定です。



排滓場掘削作業(斜面 南から)



遺構検出作業(斜面 北から)

森本C遺跡

森本C遺跡は、羽咋郡宝達志水町森本地内、宝達山西麓に刻まれた小谷の出口に位置し、眼前には大海川右岸の水田が広がっています。調査は県道拡幅工事に伴うもので、調査の結果、現在の谷を斜めに横切る弥生時代後期～古墳時代中期の川跡と、奈良時代後半～平安時代前半の川跡が見つかりました。

特に奈良時代後半～平安時代前半の川跡からは、多量の土師器・須恵器に混ざって木簡2点、木製の大型鉢や箸状木製品、「中山寺」、「川相」、「前」等と墨書した土器約50点、人面墨書土器1点などが出土しました。1号木簡には、表裏に「品治部(ホグチベ)」や「(丈?)部(ハセツカベ)」の人名が読み、内容はかすれてうまく読めませんが、彼らが物品を請求する旨が記されています。片面は表面を薄く削った後「右右右」と、文字の練習に転用しています。2号木簡はまじないを行う際に用いた呪符木簡と呼ばれるものです。また、人面墨書土器は、鉢の側面にひげを生やした人物の顔が描かれ、底には「中山寺」の墨書もありました。

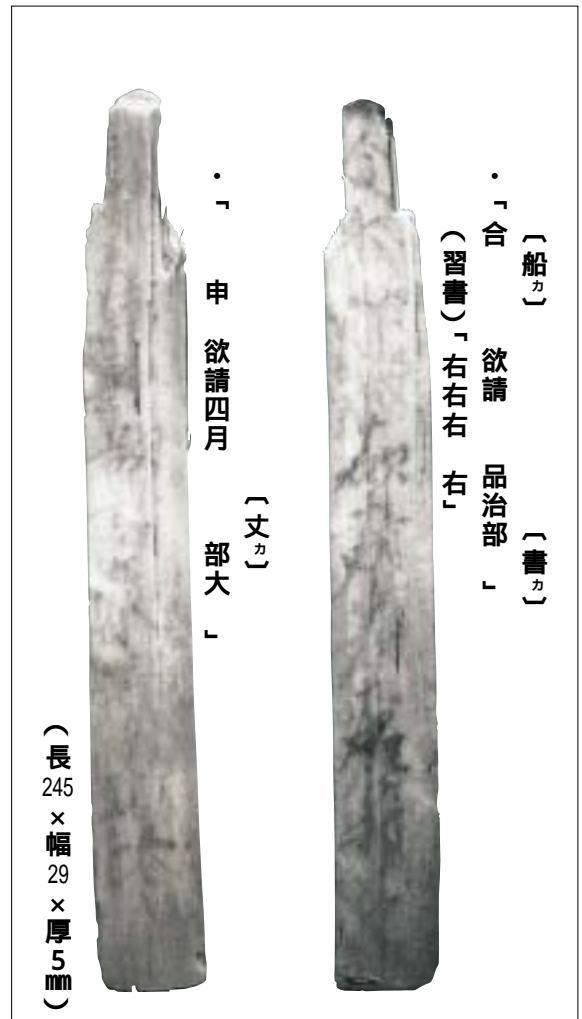
現在、伝承等は残っていませんが、墨書土器からは、調査地周辺に「中山寺」と呼ばれた古代寺院が存在したことがうかがわれ、川跡から見つかった遺物は、寺院で儀式などに使われた後に遺棄されたものと考えられます。また、遺跡近くを流れる大海川は奈良・平安時代から加賀・能登の国境をなしたことが知られ、さらに、当時の森本地区周辺には、能登へ向かう官道が通っていたことが推測されています。そうした遺跡の立地や、発見された木簡の内容からみて、国境に接し公的役割を担った施設があった可能性も考えられます。



奈良・平安時代の川跡完掘状況(北東から)



川跡内遺物出土状況



1号木簡

金沢城跡(県庁跡地)

金沢市広坂2丁目にある石川県庁の跡地は、江戸時代には「堂形」と呼ばれ、米蔵を中心とする蔵屋敷が置かれていました。

平成15・16年度には移転後の跡地における埋蔵文化財の確認調査が実施され、今年度は、本庁舎の中庭を含む周辺部が対象となりました。

主な成果としては、堂形入口の「番所」の可能性の高い礎石建物や、「堂形新馬場」の一部と推定される砂敷路面の確認があげられます。前者は本庁舎東南において3棟が重複するかたちで発見され、その1棟の根固めから出土した遺物により江戸後期(18世紀後半～19世紀前半)の年代が考えられます。一方、県生涯学習センター前で確認された後者は、万治3(1660)年に堂形に造営された馬場に比定され、土塁の基底部やその外側の雨落溝も確認できました。

その他に日本庁舎東側における藩政初期の道路遺構の発見が注目されます。幅4.5m(2間半)で両側に縁石と幅約1mの側溝が伴います。その規模の面から堂形内の基幹通路と推定されますが、既存の絵図類には記載がありません。道路遺構の方向は「いもり堀」に直交するようです。また、米蔵が建ち並んでいた場所にあたる旧本庁舎中庭からも、米蔵の礎石と思われる大規模な礎石が、1基見つかっています。



堂形番所の礎石建物



堂形新馬場



道路遺構



本庁舎中庭の調査区

冬季の埋文センター

当センターでは、1月から3月の間遺跡の調査はお休みです。それまで屋外で発掘調査していた職員も、この時期はセンターの中で仕事をしています。しかし、現場が終わったからといって調査がすべて終わったわけではありません。室内ではさらにたくさんの仕事があるのです。



報告書の作成作業

遺跡の調査は最終的に「発掘調査報告書」を作成することで完了します。「報告書」はどこにどんな名前の遺跡があり、どのような調査をして、何を見つけ、何が分かったのかをまとめた本です。そのため現場での発掘調査が終了すると、出土品と図面などの記録資料は持ち帰り、埋文センターで整理作業を行います。出土品は実測、トレース、写真撮影、版下づくりなどが行われます。最後にそれらをまとめ、文章を執筆して報告書が出来上がります。

発掘現場で使った道具類は冬の間に補修・整備して次の年の調査の準備をします。手前に見えるのは土を薄く剥く時に使う「ジョレン」です。すり減った刃先をグラインダーで研いでいます。奥に並んで見えるのは土などの重い荷物を運ぶための「一輪車」です。これらの作業は発掘調査に長年従事している作業員が行っています。経験豊富な熟練の技で次々に作業をこなします。このように手入れされた道具は次の現場で再び活躍します。



道具の補修



出土品の収納作業

報告が終わった遺跡の出土品はすべて収蔵庫で保管されます。当センターでは整理作業中の出土品は1階に保管し、報告が終わったものは2階に収納しています。この作業は主に報告書の刊行された次の年度の夏と冬の時期に行われます。また、こうして報告書に掲載された遺物などが即座に検索できるように、すべての資料はコンピュータで登録・管理されています。このような出土品の収納・管理も埋蔵文化財センターの大切な仕事の一つです。

平成16年度 話題の遺跡講座



東先生の講演の様子

平成16年11月21日(日)石川県立生涯学習センター3階大会議室において話題の遺跡講座が開催されました。今回は、2004年にユネスコ世界遺産に登録された高句麗古墳群などアジアに多数存在する色鮮やかな壁画古墳に注目し、「東アジア壁画古墳の世界」と題し徳島大学の東潮教授に講演していただきました。

講演に先立ち、当センター伊藤雅文調査第4課長より「北陸の後・終末期古墳の特質」と題して北陸の古墳の特色についての関連報告があり、朝鮮半島や日本各地と北陸との交流を概括しました。

東先生の講演では、普段見る機会のあまりない北朝鮮や中国の色鮮やかな壁画古墳を紹介され、描かれた絵や位置、石室の構造などからその相関関係に

ついて講演されました。また、高松塚古墳やキトラ古墳の壁画についても解説していただきました。

当日は荒天にもかかわらず約90名の方々に参加いただきました。みなさん色鮮やかな壁画古墳の世界に魅了されていたようです。

平成16年度 発掘速報会



縄文時代の川跡(津幡町 加茂遺跡)

平成17年3月6日(日)石川県立生涯学習センター3階大会議室において発掘速報会が開催されました。遺跡発掘調査の概要報告の後、6つの遺跡の発表が行われました。発掘調査を担当した調査員がスライド・配布資料を使い、最新成果をわかりやすく発表しました。

6つの遺跡の概要は以下のとおりです。津幡町の加茂遺跡では縄文時代の川跡を発掘し木組み遺構を確認、白山市の北安田南出遺跡では弥生時代の集落跡を発掘し土坑からまが玉・管玉などが出土、能美市の秋常山古墳群では2号墳の埋葬施設の特色や白玉・鉄刀などの副葬品を確認、金沢市の畝田・寺中遺跡では古墳時代の集落跡を発掘し平地式建物、井戸などを確認、七尾市の小島西遺跡では戦国時代の

屋敷と道路跡を確認、金沢市の金沢城跡では三十間長屋横で江戸時代初期の板塀の跡や、いもり堀の形状などを確認した、と発表がありました。

今回の発掘速報会は天候にも恵まれて約200名の方々が参加し、会場に準備した椅子を増やすほどの盛況ぶりでした。発表後の質問も活発に行われ、有意義な発掘速報会となりました。

収蔵品ギャラリー

当センターが保管している数多くの出土品の中から選りすぐりの資料をご紹介します。今回は「遺跡から出土した貴金属」をテーマに遺物を選んでみました。

収蔵品 1 わどうかいちんぎんせん 和同開珎銀銭

津幡町加茂遺跡

和同開珎は中国の開元通寶を手本として和銅元年(708)に鑄造された銭貨で銀銭と銅銭の2種があります。初めに銀銭が発行され、次いで銅銭が発行されましたが、銀銭は和銅2年(709)8月には廃止されてしまいました。そのため銀銭の出土した例は全国的にみても多くありません。このような貴重な遺物が出土したことは、加茂遺跡がいかに重要な場所であったかを物語っています。

直径2.4cm、重さが6.4gで蛍光X線分析の結果ほぼ純銀で出来ていることが判明しています。



収蔵品 2 どうしんきんいたばり じかん 銅芯金板貼耳環

おばたけみなみ 珠洲市大畠南2号墳

直径3.5cm、重量5.9gの比較的小型の耳環です。耳環とはイヤリングのような装身具です。7世紀後半につくられた円墳の横穴式石室から出土しました。

全部が金で出来ているように見えますが、銅の丸い棒をCの字状に曲げ表面に金の薄い板を貼り付けて作られています。この金は分析すると、わずかに銀を含む純度の高いものでした。このような金属製の耳環は、そのほとんどがサビに覆われて出土します。しかし、この耳環は状態が良く、今でも1400年前と変わらぬ黄金色の輝きを見ることができます。



訪ねてみよう加賀・能登の遺跡

国指定史跡 まわき 真脇遺跡



真脇遺跡航空写真

真脇遺跡は昭和57年・58年の発掘調査によって縄文時代の前期初頭(約6000年前)から晩期終末(約2300年前)まで、約4000年の間繁栄を続けた、他に例のない長期定住遺跡であることが判明しています。本遺跡は標高4~12mの低地に位置する湿地遺跡であったため、普通は腐って残りにくい動植物で作られた遺物が大量に保存されていました。特に前期末から中期初頭(約5000年前)の層から出土した大量のイルカの骨が出土しています。その数の多さから真脇の縄文人はイルカ漁を行っていたと考えられています。また中期中葉(約4500年前)の層からは板敷き土壌墓が4基見つかっています。晩期(約2800年前)の土層からは巨大なクリの木を半割りし、円形に立てて並べた「環状木柱列」が見つかっています。このように多種多様な遺物が出土した真脇遺跡は縄文文化の見直しを迫る貴重な遺跡として位置づけ

られ、平成元年に約37600㎡が国指定史跡に指定され、さらに、平成3年にはたくさんの出土品のうち219点が国の重要文化財の指定を受けています。

真脇遺跡は現在も史跡整備が進められており、周辺一帯には遺跡にちなんだ施設が整備されています。隣接した真脇遺跡縄文館では遺跡から出土したたくさんの遺物を見学することができます。また他にも遺跡公園、縄文温泉、宿泊施設などがあるので時間を気にせずに縄文散策を楽しんでみてはいかがでしょうか。



縄文館展示室



体験の様子

真脇遺跡

交通 能登町宇出津より路線バスで約20分
所在地 石川県鳳珠郡能登町字真脇48-100
お問い合わせ 真脇遺跡縄文館
Tel 0768-62-4800

真脇遺跡縄文館

開館 午前9時から午後5時(毎週月曜日、12月29日~1月3日は休館、ただし月曜日が祝日の場合翌日が休館)
入館料 大人300円 中学生以下150円
お問い合わせ Tel 0768-62-4800